批評・紹介

支那古代家族制度研究　加藤常賢著

昭和十五年九月十二日　岩波書店發行
菊判、六七一頁、定價六圓

本書は加藤博士十五年の研究成果だけあつて、さうあつさりと讀めるものではない。昨年出た支那に關する著述は、寢ころんで讀めるものや讀まなくても良いものが多い中に、本書の如きはもつとも心を潜めて讀まるべきものだらう。私はできるだけゆつくりと二回讀み、その大骨だけはわかつたつもりだが、詳細な考證の隅々までは理解し得た自信がない。その大骨の更にあらましだけでも紹介しておきたい。

緒言によると、博士は家族道德を理解する爲に、その基礎である家族制度の究明に向はれ、經典の神聖性が儒者から奪つた史的眼光を取戻して、支那古代家族制度を歷史的變遷の下に眺めることに努められた。そして支那家族制を型體から通觀して氏族型體、宗族型體、家族型體の三段階の變遷に規定し、その內容を次の如く分類された。

一、氏族型體 ─ 血族的氏族制……姓
　　領土的氏族制……氏

二、宗族型體 ─ 宗族的血族制……小宗（血族的大家族制）
　　宗族的家制……大宗（封建的氏）

三、家族型體 ─ 三族制……曾祖宗型體—祖宗型體
　　單家族制

この一、二の姓氏大宗小宗に就いての史的變遷の過程の研究が上編「古代家族制の型體的研究」であり、支那で特に發達した宗族組織を中心とする組織に就いては下編「爾雅釋親の親族組織及稱謂の研究」があり、最後に三族制の考察が結尾となつてゐる。これが本書の構成である。

上編は支那古代家族制度の基礎である姓制度即ち血族的氏族制の研究から始まる。この族組織は、族及個人の有土を條件とする氏制度と併存し、氏を中心とする地域的血族組織へと移行した。この時には、姓は氏よりも廣い血族集團、氏は血族中の一分派として土地を中心とせるものとして判別されてゐた。兄弟相續、兄弟終身共住であつた。（氏の族制）しかし周の封建制度が行はれ、氏の家制の發達により、封建的家の尊重、嫡子相續制の確立、大宗制度の完成を見た。宗組織は宗即ち祖廟を中心とする血族集團制となつた。換言すれば、生人中心の姓制度は、封建的始祖中心の大宗制の死者中心の族組織となつた。（氏の家制）氏の稱呼は始祖からの世襲的封建財產を有する特殊地位の標示であつたが、春秋に及んで官職世襲者も氏を稱するに

至り、姓の稱號が氏より階級の高い諸侯の特權的稱呼と考へられ、天子賜姓說などが起つた。封建制度の影響を受けた氏制度は、血族觀念の狹化から氏の範圍が血族範圍と考へられ、遂に氏が姓化することとなつた。他方小宗制度の起原は、禰を奉ずる兄弟の終身共住共財生活から發生した族制に在つたが、その兄弟相續制は、長子相續の封建制度の影響を受けて、此の族制は四親までの在廟者範圍の血族集團となり、嫡兄が次弟以下を統括する族集團となつた。又封建的家を特殊化せん爲に庶長子が兄弟集團を統拍するといふ族生活からの一變化が發生した。最後には小宗内に四小宗が起り、族集團的意味は稀薄になつたが、更に後には父生存中のみの共住による三族組織が生じ、四小宗すら宗譜上の名目的存在と化し、結局姓氏宗三者は全く混融してしまつた。

以上は上編のあらすぢであるが、これだけでは傳へるべくもない詳細嚴密な考證と明快な理論とがある。姓氏大宗小宗の各問題に就いて、廣く諸家の學說を批判檢討しつゝ、前後矛盾するところのない整然たる理論が展開されてゐる。先づ理論が先にありそれによつて資料を系統づける樣な理論ではなく、あくまで嚴密冷靜な考證とそれに基く正當な解釋とから打出されて來た理論である。その一貫せる理論體系の隅から隅まで油斷のならぬきびしさであるが、就中姓制度の母系起原說批判（第一章第三節）、姓の原義の姬字からの說明（第一章第四節）、姓から氏への分離過程の說述（第二章第一節）、周代の封建制度による族生活の崩壞に關する理論（第二章第三節）、氏の姓化（第二章第六節）別子の意義の考察（第四章第二節）、小宗團體の族生活の基礎を適兄を宗とする兄弟共住共財に求める考へ（第五章第二節第三節）、その族生活を廟制の根據とする解釋（第五章第三節）などは特に注目すべきところであらう。

下編は、上編に說かれた宗族組織を中心とする爾雅釋親の親族組織を考究して、其起原變遷を尋ね、更に宗族母黨妻黨婚姻の四類中の各稱謂に就いての詳密な考察から、古代親族組織及婚姻型式を闡明せんとするものである。下編は單に爾雅釋親の組織を固定されたものとして眺めるのではなくて、博士の視野は遙かに廣い。その組織そのものは或時代の型體を示してゐるに過ぎぬとする史的眼光は、親族組織の本質起原變遷の尋求へと向けられてゐる。

先づ第一章は宗族組織から始まり、次に姻族の二黨組織の研究に於ては同姓不婚と重婚就中婚媾とから、二族連世交換婚姻（dual system）を原始的婚姻型式として結論された。この見解は後にも力强く說かれてゐる。第二章以下は一々の親族稱謂に就いてその起原的意味、稱謂發生の機構、その變遷過程、被稱謂者の地位などに關する詳細な考證記述である。一々の文字

の形音義から、婚姻型式、住居型式、親族員の居住場所などに關する說明がある。今日普通に理解されてゐる單家族制に於ける各稱謂が、其起原は更に古く廣い群族生活にあり、それが漸次狹化されてきた過程が、個々の稱謂に就いて說かれてゐる。その全體を見通した上での結論としては、上世代或は年長者に對しては老の意を示す尊敬的稱謂、同世代或は同年者に對しては次第次序の意を有する稱謂、下世代者に對しては卑小の意を有する稱謂を使用することが言はれてゐる。古代に於ては年齡による階級制が嚴重であり、老人が尊重され、長幼の序が重要な道德となる。その心理が稱謂の上に顯著にあらはれてゐるのである。個々の稱謂に就いての研究は何れをとつても興味あるものであるが、祖卽ち且を墳墓とし、人に就いて謂つては先行の人とし(第二章第二節)、父を老者の意とし(第三章第一節)、或は弟 brother をと解し(第五章第四節)、娣姒と姉妹との區別を男女の分離生活から解き(第六章第四節)、亞を集團穴居生活から次第順序の意とする(第十五章)などは、その考證、解釋の方法に於て注目すべきところであらう。先の二族交換婚姻組織に就いては、第八章從母・從母昆弟に豐富な原始社會學の知識を驅使して論ぜられ、また第九章甥・舅姑では、これらの稱謂の獨特の用ひ方が、一方的又は交互的 cross cousin 婚姻關係から明快に說明されてゐる。この二章は下編中の最も興味深いところで、博士の創見がはつきりあらはれてゐる。

この外に附錄として一、昭穆制度考、二、媵考がある。前者は昭穆制度を原始社會學上の結婚階級(marriage class を)參考とし、後者は soro ate を參考としつゝ、極めて整つた論旨が展開されてゐて、ともに本文と深く關聯する論文である。

以上で簡單な紹介を終るが、ペンを片手にゆつくり讀めば、積極的な弱點は見つからぬまでも、考證の隅々までは理解できぬまでも、疑問を懷く箇處が全くないわけではない。しかしそれは單なる疑問であつて、私は何の解答をも持たぬのであるから、こゝに述べても無意味であらう。たゞ氏族組織から三族制への變遷の根本的原因と考へられる家族經濟型式の變遷に就いては、ほんの少し附け足されてゐるだけで(五七三頁)、物足らぬ感じがする。この方面への研究は極めて重要であると思ふ。それは本書の直接目的とするところではないであらうが。

本書を讀んで何より氣持がよかつたことは、全體の體系と研究方法とがはつきりしてゐることである。この樣な體系には、論文の寄せ集めでは求められぬ味がある。方法はあくまで周到嚴密な考證である。しかし考證に終るのではなく、正當な理由ある解釋がそれから進められる。所謂歷史的發生的見解が全體を貫いてゐる。特に原始社會學の研究成果を批判的にとり入れて研究を進められたことは、たしかに支那古代家族制度に關す

る研究を前進させた所以である。

〔小畑　龍雄〕

東亞古文化研究

原田　淑人　著

昭和十五年十一月發行

本書は明治末年以來三十有餘年間に渉る著者の論文四十八篇の集錄されたものである。今本書集錄の諸論文を要約するならば、先づ著者の研究が正倉院御物による唐代文化の闡明に出發され更にそこに見られる東西兩文化の交流に思ひをいたされ、遂にはひろく考古學上より東西兩文化の關係にまで發展され、たことが本書の根幹をなしてゐると思ふ。而もこの根幹こそ實に著者の今日までに辿られし研究の發展過程そのものではあるまいか。東亞古文化の研究といふ困難なる分野に著者が獨自の方法もて開拓の歩を進められ、既に過去に於てその貴重なるアルバイトは數回の公刊を見てゐる。資料の不備によくうちかたれるべく著者のとられた方法は常に遺物のみでなくむしろ文獻に重點を置かれた。而もその文獻の渉獵驅使も常に遺物に對する深き理解もてなされたが、それはひいて著者獨自の學問體系を築かれた所以と思ふ。その著者の學問體系は古くは『支那唐代の服飾』或ひは近年の『漢六朝の服飾』に於て遺憾なく發揮されたのである。我々はこの兩書によつて充分著者の學問體系を知つたのであつたが今新たに本書を手にする時、更にさきに述べた如き著者の辿られ且つ發展された研究過程を知ることができるのである。而もその研究過程の出發點が正倉院御物を通しての唐代文化の闡明であつたことにより、著者のとられた獨自の方法が自ら定まつたのではあるまいか。正に對稱的に又方法的に新しき分野開拓の運命をになはれた輝かしき出發であつたのである。かくて著者のとられた方法、それによる體系、體系化を裏づける研究過程を今我々は如實に知ることができよう。

次に本書中の一々の論文を紹介する煩を避けて大體を述べて見よう。先づ唐代ひいては我が天平時代の風俗を考察せられたものをのせるが、かゝる著者の欲求は自ら正倉院御物への注目となつたのである。而も唐代文化を反映せる御物のエキゾチックな感が實に波斯、東羅馬、印度等の西方要素に本づくことを檢出されるべく努力されたのが「正倉院御物を通して觀たる東西文化の交渉」の一論である。外來系の圖紋に就いては巴紋、漢代の騎射狩獵文が述べられる。古鏡關係のものとしては海獸葡萄鏡をはじめ唐鏡背文の西方意匠や寶飾、或ひは又古鏡の背紋と一般工藝圖紋との關係等が玻璃鏡の起源と共に含まれてゐる。次には古代の刀劍であり更に問題多き秦の金人、銅鼓が興味深く論ぜられてゐる。陶器、陶俑その他明器等を取扱つた諸論文中には從來不明なりし支那南北朝時代の土器を紹介された